

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 586 号] 2011 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.586

April 2011

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

今年も荻窪音楽祭から招待 5月15日、荻窪教会

## 今こそ、「地に平和」

大村 恵美子

チュニジア、エジプト、リビア等と、あいつぐ中東・アフリカの民衆蜂起に世界中が騒然となったこの春に、日本ではまた、世界最悪クラスの地震、大津波、そして原発事故が、猛然と襲いかかってきた。

スポーツマンや政治家によくある例だが、勝負師の頼りなさや孤独から、とりすがる相手をもとめて、おかしな宗教に凝るやからが多い。この天災を、得意げに「天罰」と断言した愚かな知事がいて、その自分自身こそ代表的な「我欲」のかたまりなのに、ぬけぬけと「日本人の我欲がこの天罰をまねいた」と豪語した。私は、原発だけは、人類が核を持ちこんだゆえの人災と考えるが、地震・津波は、そのような構造をもった地球に住む人類が、昔から蒙っている天災だと判断する。これらをすぐ神の怒りと短絡して解するのは、あやしげで原始素朴な原理主義者だろう。

海外の広汎な民衆蜂起などのたて続けの動乱に、私たちはどう対処すべきなのか。グローバリゼーションとIT普及の影響で、底辺に置かれ、さまざまな格差に喘ぐ、世界中のひとびとが目覚めてきたのは、歴史の必然的な段階であろう。日本のこの天変地異でも、東日本の惨状が目を追って明らかになり、見えてくるのは、東京のエネルギー需要(「我欲」)を養うための原発がそこに立地することもふくめ、ある意味では、昔から顧みられなかった漁民・農民の生活の過酷さが、おおよくの

目に浮き彫りになってきた面も多いように思われる。「地震・雷・火事・親父」に長く忍従してきたのだが、これからは、憲法にも明記してある人権尊重の具体化として、被災者と病者、困窮者を問わず、どんな悲劇に陥るひとびとに対しても、最低生活基準を維持確保できる法案を、一日も早く実現しなければならない。

不公平の恨みをいまく層をとりのぞくことが、地球上の殺し合い、内紛、戦争の消滅、つまり「地に平和」にゆきつく最短コースである。

3月6、7日、私たちは葉山の海岸を数人で訪れ、おだやかな水平線上に洛陽する光景をみて感動した。その数日後の大津波を経てからは、もうおそらく、あんなに平穏な瞑想は難しいことだろう。また、小さな国境の島々をめぐるの、隣国同士のエゴのぶつかり合いは、あの水平線の彼方で、すでに年ごとに激化していたのである。

四季の風光明媚になれ親しんだ日本人、とりわけ都会人は、海を鑑賞するばかりで、じつは「地に平和」実現のためには甚大な友好の相互努力が緊急であることを忘れていたのである。「日本人のアイデンティティは我欲だから」といった馬鹿げた話ではない。

これらのことを機会に、さていま私たちのなすべきことは？ 生きることに感謝し、生を講えることのみ。人間、天地自然を愛し、自然から与えられる資源を公平・平等に分配する努力をつくすことである。生きているものが互いに慰め、励ましあうことである。

私たち合唱団は、野球選手がフィールドに立つのと同様、できるかぎり完成に近づけた音楽を、ひとびとに紹介し、公演してゆく。家に縮こまることなく、私たちの歌が社会に必要なのだと信じて練習にいっそう励んでゆこう。学校も勤務もつづけよう。寿命によって区切られる前に、自分から死の床にしがみつくだけの生活は選ばまい。人間は、生まれてすぐに死ぬ子も、認知力を失っても生きつづける人も、みなそれぞれに地球上の生を享受してゆくものである。その与えられた時間を堂々と生きることが、他の人間を温め、社会を押し進めてゆくのである。

今は、5月15日の荻窪音楽祭をめざして、自分自身に真剣勝負を挑もう。(東京バッハ合唱団 主宰者)

< 第 23 回 荻窪音楽祭 >

ワークショップ&コンサート

「バッハ《口短調ミサ曲》を日本語で歌う」

[日時] 5月15日(日) 15:00 開演(14:30 開場)

[会場] 日本基督教団 荻窪教会

ワークショップ「バッハの合唱入門」

“ドイツ語? ラテン語? ニホン語?”

コンサート = 《口短調ミサ曲》より Credo 以下全曲

“われ信ず” “聖なるかな” “ホサンナ”

“幸なり” “小羊” “平和をわれらに”

[主催/出演] 東京バッハ合唱団 (オルガン: 金澤亜希子)

[入場整理券] 500 円 (楽譜資料代込み。定員 100 名)

(ワークショップ参加ご希望の方には、前もって楽譜を郵送いたします。その旨を併せてご通知ください。詳細はチラシを参照)



大村恵美子・大村健二 [編]

## 『バッハ コラール・ハンドブック』

3月末、刊行です。お待たせしました。

発行：春秋社  
体裁：A5判 / 400頁  
定価：2940円(税込み)

合唱団関係者・月報読者の皆さまには、割引価格でお届けいたします。

特価：2500円

送料：300円(郵便振替用紙同封します。後日、郵便局でご清算ください)

事務局へお申し込みください(申込み先：月報タイトル欄ご参照)

これは、月報2008年12月号(第558号)で、「バッハ教会カンタータ中のコラール[全142篇]」として、連載を始めたものでしたが、【1】Ach bleib bei uns, Herr Jesu Christ とどまれ 主イエスよ に始まり、【7】Ach wie flüchtig, ach wie nichtig はかなくむなしき 地なるいのち に至ったところで(2009年3月)、目前にせまった第5回ヨーロッパ演奏旅行の準備に追われ、夏に帰国後は、あいつく報告記事で紙面がうまるなど、連載がとどこおっていました。

じっさいのところは、掲載すべきテキストの探索やデータの収集に思いのほかの時間がとられ、コンスタントな連載は不能となっていたのです。紙面では第7曲までで、ach, ach, achと嘆いているうちに中断してしまいましたが、陰では多くの方々のご支援をいただきながら作業をすすめ、このたびようやく、春秋社から発刊となりました。

バッハ関連の銘著を続々と上梓している同社の名編集者・高梨公明氏をご紹介くださったのは、同社からも吉本隆明氏との対談集などをお出しになっている、団友の笠原芳光氏(京都精華大学名誉教授・宗教思想史)。感謝いたしております。

編集者のご要望もあり、コラールの範囲をモテットや受難曲、オラトリオにまでひろげた結果、最終的には[全154曲]の収録、400頁の大部となってしまいました。合唱曲に使用のバッハコラールの全節を、楽譜とともに集成した書物は、世界初とのこと。外国の友人たちにも使っていただくことを期して、索引の見出しなどにはドイツ語を添えていただきました。バッハ愛好家の皆さまには、一生懸命、お手もとで使い続けていただきたいと思います。

\* \* \*

以下に「はじめに」と「本書の使い方」を抜粋・転載して、本書の内容紹介に代えさせていただきます。

### はじめに

原始キリスト教会の発生以来、ヨーロッパでは、さまざまな形の聖歌が修道院や教会に、あるいは民間に蓄積されてきた。16世紀にいたって、宗教改革後のプロテスタント教会では、礼拝中に、従来のミサにかわって、一般信徒が自国語(土地のことば)で何曲もの会衆讃歌(コラール)を歌うことになったが、これらはマルティーン・ルター(1483-1546)を中心とした改革の同時代者たちに

よって豊かにその供給が開始され、三十年戦争(1618-1648)前後のドイツ全土に爆発的なひろまりを見せることになる。コラール作者たちが生んだ詩や曲は、かれらを育んだ土壌の文化を色濃く反映したが、遠く古代・中世からの蓄積にその淵源を発するものも少なくなかった。

このコラールの最盛期に、J.S. バッハ(1685-1750)は、カンタートとして実用の教会音楽を作曲・演奏しつづけ、彼の作品は、オルガン曲をふくめ、コラールを基礎として構成されるものが主流をなすほどになった。現在残されているバッハの全作品のうち[コラールを基礎とするものは]、合計500数十曲を数えることができる。BWV番号による現存の全作品数が1100余曲の中にあって、優にその半数がコラールに関わっているのである。

東京バッハ合唱団は、定期演奏会では、105回の現在にいたるまで、日本語訳詞で歌う方針で一貫してきた。母語で歌うことにより、バッハの祖国のひとびとと同じ魂の深みでの共感に至れるからである。いまだ全作品を紹介するまでの道半ばではあるが、教会カンタートとモテット、主なる受難曲とオラトリオに関しては、ほとんどの演奏用訳詞を完成することができた。過去半世紀の訳詞楽譜を整理し、また未上演作品の訳詞作業をすすめながら、「同じコラールの歌詞が」そのつど異なった訳にならないよう骨折った結果、ある程度の枠をもうけて、枠内の作品同士では矛盾のないようコントロールする必要に迫られることになった。こうして着想されたのが、彼の教会カンタート約200点に対象をかぎって、その中に用いられているコラールの訳詞を統一した『コラール・ハンドブック』だったのである。

私の最終の望みは、私の試みた訳詞によって、日本人である私たちが、たとえば讃美歌「きよし この夜」のように、生活のなかで自然に、時々ふさわしいバッハのコラール旋律が口をついて出てくるようになることである。私は、「きよし この夜」に見合うものが、バッハによって料理されたドイツのコラールの数々だと思う。「きよし この夜」が、原語が何語かも知られぬままに世界中で愛唱されているように、たとえば「あしたに輝く たえなる星よ」(カンタート第1番に用いられたフィーリップ・ニコライのコラール。本書では【145】)など、日本人が日本語で歌ってくれるようになるには、あとどのくらいの年数がかかるのか、私の寿命は考えず、人類のはるかな将来を夢見るばかりである。もしこのハンドブックが、ほんとうに音楽の好きなひとの手に乗って、使いこなされるならば、無限のたのしみが広まり、深まること極まりないと、私は期待している。(大村恵美子)

本書の使い方

18世紀ドイツの、カントール・バッハの聴き手たちとは違って、われわれ、時間と空間を大きく隔てた異教の地にある聴き手は、カンタータを聴くことをとおしてコラールを知るのであって、コラールへの親しみが初めにあり、そこでカンタータが演奏される、というバッハが作曲の前提とした順序とは逆の出会い方をせざるをえない。

わが国にも、バッハの宗教的背景に近い流れのキリスト教会があり、ここに集めたコラールのいくつかの旋律には親しみを覚えるという方もおられよう。しかし、大多数の、しかもドイツ語を母語としない日本人にとっては、これらのコラールは教養の対象ではあっても、当時の民衆が朝に夕に親しんだような“愛唱歌”としての共感をいさぐにはほど遠い。本書は、日本語というわれわれの母語をとおして、バッハ音楽の前提としてあった、いわば“コラール共同体”への参入の手がかりを提供しようとするものである。

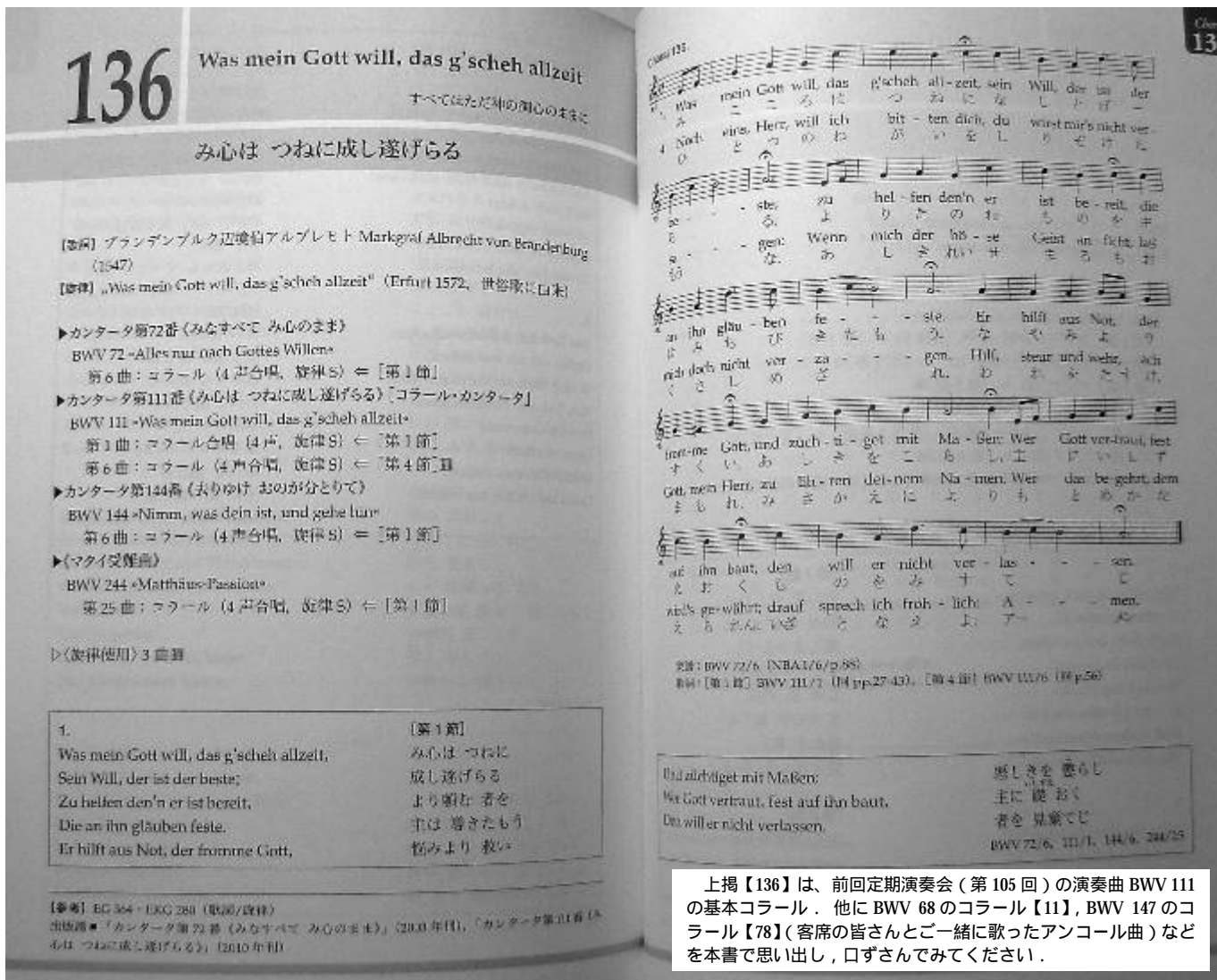
教会カンタータやオラトリオ、受難曲など、現存するバッハの宗教合唱曲のなかで、歌詞あるいは旋律として登場するコラールを集めてみたら 154 曲となった。これらは、東京バッハ合唱団の半世紀の活動のなかで、ほぼ

すべて、実際にステージ上で、しかも日本語によって演奏されたものである。つまり、掲載された歌詞は、ドイツ語の原詞が楽譜上で音節と音符を対応させているように、日本語訳詞もまた歌われることを前提としている。

各コラールは、原則として見開きの2ページで納めた。左ページには、バッハが使用した全詩節の歌詞を、コラール作者や作品のなかでの使用の状況などの若干のデータとともに紹介し、右ページには、バッハが書いた姿でのコラール旋律の楽譜を掲げ、音符の下に原詞と日本語訳詞とを並行して掲げた。1曲1曲のコラールを、まずは口ずさんでみていただきたい。

バッハ作品を鑑賞したり演奏したりする際に、あらかじめ、登場するコラールに親しんでおく、というためにもぜひ役立たせていただきたい。巻末の索引から、目的のコラールに至りつくはずである。

なお、コラール歌詞は、バッハが使用しなかった場合でも、可能な限りそれぞれの第1節を掲げた。冒頭詩節の冒頭行こそが、そのコラールの名称であり、すなわちそのコラール全体の象徴でもあるからである。器楽のみで定旋律の引用がなされるとき、作曲者バッハの脳中でも、聴き手の心のうちでも、まずは冒頭第1節が歌われていただろう。(…)



## 逗子・葉山へ 誕生会小旅行

青木 道彦（後援会員）

3月はじめ、大村恵美子先生の80歳のお誕生日を祝って、有志が逗子・葉山に2日間（6日〔日〕、7日〔月〕）の小旅行にまいりました。加藤剛男さんの綿密な計画にそって、湘南の史蹟や自然を楽しんで、夜には先生の誕生会を行ないました。参加者はそれほど多くなかったものの、意義深いときを過ごしました。2日目には、かなりの雪が降るなかを帰路につきました。

今から十数年前には大村先生は、自分がある年代になったら、合唱団から引退しようと考えていると言われておられましたが、今まで指導をつづけられ、さらにここ数年間、意欲あふれる演奏計画を発表されておられることは、まことに嬉しいことです。

これに加えて『バッハ コラール・ハンドブック』（春秋社）が刊行されました。この著作は、主として大村健二さんのご努力で完成したもののようです。ここに集められたコラールには、バッハがカンタータを作曲した時よりもはるか前の時代から、すでに愛唱されていたものが多く含まれております。たとえば宗教改革者ルターが作曲した「堅き砦ぞ わが主は」（Ein feste Burg ist unser Gott）は、バッハの同じ題のカンタータ BWV 80 のコラールとして、この曲の中心となっております。ルターが書いた詞とメロディーは、約200年をへて、バッハの手によって、自国語（ドイツ語）で神を称えたいというルターの精神を結実させており、大村先生の、自国語（日本語）でのバッハ演奏というお考えにも、ここに原点があると私は考えております。

ここ一、二年は合唱団もさまざまな困難に直面されていたようですが、この待望の著作刊行は、一気にみなさまの活動を盛り上げる契機になるものと確信しております。合唱団のみなさまもぜひ、それを信じて活動をもりあげて行って頂きたいと願っております。

[ 筆写：川村学園女子大学元教授・西洋史学、著書に『エリザベス I 世 大英帝国の幕開け』（講談社現代新書）など ]



### 2011年の活動予定

< 第23回 荻窪音楽祭 >（本紙 p.1 に詳細）

ワークショップ&コンサート

「バッハ《口短調ミサ曲》を日本語で歌う」

日時：5月15日（日） 15：00 開演（14：30 開場）

会場：日本基督教団 荻窪教会

< 野尻湖合宿と特別演奏会 >

期間：8月5日（金）～7日（日）

合宿：野尻湖ハウス（2泊3日、1泊のみも可）

湖畔のチャペルコンサート

日時：8月6日（土） 15：00 開演（14：30 開場）

会場：NLA内神山教会（オーディトリウム）

《口短調ミサ曲》より“グロリア”

教会カンタータ第71番《主 わが君》

入場無料

< 創立50周年記念企画1 >

《口短調ミサ曲》日本語演奏（第106回定期演奏会）

日時：12月3日（土） 14：00 開演

会場：杉並公会堂大ホール（荻窪）

出演予定：

光野孝子（S）、佐々木まり子（A）、鏡 貴之（T）、新見 準平（B）、草間美也子（オルガン）

東京カンタータ室内管弦楽団（管弦楽）

大村恵美子（指揮）

チケット発売予定：2011年6月1日

< 創立50周年記念企画2 > に向けて

練習開始：12月5日（月）より

練習内容：《クリスマス・オラトリオ》I-III、教会カンタータ第71番、《マタイ受難曲》以上の並行練習

< 創立50周年記念企画1-5 >

### バッハ4大合唱作品[日本語]連続演奏

合唱参加者募集。どの企画からでもご参加ください

< 記念企画2 >

《クリスマス・オラトリオ》I-III、カンタータ第71番《主 わが君》（2012年12月予定）

< 記念企画3 >

《マタイ受難曲》（2013年春予定）

< 記念企画4 >

《クリスマス・オラトリオ》IV-VI、カンタータ第76番《主の栄光を 天は語り》（2013年12月予定）

< 記念企画5 >

《ヨハネ受難曲》（2014年春予定）

3月6日、葉山の「日影茶屋」にて昼餐。中庭で春の陽射しを浴びながら準備を待つ、左から団員の加藤さん（B）、筆者・青木さん、主宰者、その後ろ宮城さん（B）、高濱さん（S）、風岡さん（A）